熊本大学教育学部紀要，人文科学
第46号，65—70，1997

小学校教員養成課程のための音楽科教育内容の研究

吉　永　誠　吾

A Study of Teaching Materials to the Prospective Elementary School Teachers

Seigo YOSHINAGA

(Received September 1, 1997)

1. 序　　論

最近，人々の間で脳の働きに関する書物がよく読まれている．このことは脳の働きに対する関心が非常に高いことを示している．この中で共通して言われていることは，人間の脳が，左脳と右脳に別れており，その働きもそれぞれ言語脳・音楽脳というふに分かれているということである．そのなかで大変興味深いことは，今までよく分からなかった人間の心の働きというものが，ホルモンによって動かされているということが明らかになって来たことである．つまり，怒ったり，泣いたり，笑ったりという心の動きもホルモンという物質によって支配されているのである．また，脳波と心の動きの関係も研究され，それらの書物が指摘するところに従い，小川のせせらぎ，波の音などといった右脳を重視した環境CDなども売られている．

おそらくは，厳しい受験競争のなかで干からびた知識の詰め込みばかりを余儀なくされた日本人が，社会に出て生きて行く中で，より潤いを求めていることと無関係ではあるまい．児童数が減少している現在でも受験競争の勢いは衰える兆しが見えない．あいかわらず詰め込み教育が行われ，子供達の心は干からびるばかりである．いじめや非行，登校拒否といった問題が示すように，すでに今の受験教育システムは破綻してしまっている．

言語脳は文字どおりに言語機能のほか，数学の計算などの働きがあり，右脳つまり音楽脳は創造性，感性，直感力や図形認識などの機能をつかさどっているということである．もしそのように，人間の脳が左右に分かれており，その働きがある程度独立しているのであれば，その重要性は等しいと言えるのではなかろうか．しかるに，現在の高校や大学の入学試験では英，国，数，社，理といった左脳中心の教科で占められており，音楽や美術等の芸術教科は特別そのような専門家を目指す受験生のみが勉強することとなっている．日本国憲法第二十五条には「すべて國民は，健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する.」と書かれている．また第二十六条には「すべて國民は，法律の定めるところにより，その能力に應じて，ひとしく教育を受ける権利を有する.」と書かれ，その第二項に「すべて國民は，法律の定めるところにより，その保護する子女に普通教育を受けさせる義務を負ふ.」と書かれている．つまり，義務教育によって日本国民は健康で文化的な最低限度の生活が出来るための能力を身につけなければならないのである．したがって，義務教育に携わる教師は子供達に，そのような能力が得られるように指導しなければならない．

言い換えるならば，義務教育は国民一人一人が個人としての尊厳を保ちながら，社会の中で協

調して生きて行くことが出来る知識，技能及び判断力を身につけるべき場所なのである．しかし，すでに述べたように，非常に厳しい受験競争のために昨今の学校教育はそのあるべき姿からはほど遠いものとなっている．一人の人間の成長はその環境によって大きく変わり得る．一人一人の能力や個性を尊重し，円満な人格を育てるためには教育はいまどのような課題を抱え，それをどのように解決して行くべきなのであろうか．そして音楽教育はその解決の鍵ともなるべき重要な役割を担うべきでありまたそうすることが出来るのではなかろうか．

ヴァイオリニストとして演奏活動を続けながら二十年間，義務教育教員養成にかかわって来た筆者は，自分自身の芸術活動を通じて，これからも芸術教育の重要性を主張し，実践していくつもりであり，芸術教育ががもっと教育現場で重視されることを強く願うものである．

I 音楽教育の抱える問題点とその役割

1 音楽が教育に果たすべき役割

我が国において高校や大学の受験競争が激しくなり始めたのはおそらく昭和22，23年のベビー・ブームの世代からではなかろうか．この受験競争は一方で我が国の科学技術の水準を高め，産業を発達させ，経済的な競争力を強くしたと言えよう．そして教育内容も知識中心のものが重視されるようになったと思われる．しかし他方では，より豊かな生活を求める欲求がさらに受験競争を加速させ，教育における自己中心主義，つまり自分こそは，あるいはわが子こそはという利己主義を蔓延させたといえよう．このため否が応でも受験競争の渦中にほうり込まれる子供達の人格は，大きく歪められている．過熱する受験競争，青少年の非行問題，いじめとそれに伴う登校拒否など学校現場では大きな問題を抱えているのに，表面的な対症療法に終始して根本的な解決を考えようとしない．

レナード・バーンスタインは「音楽は感情を表現することである．」と言っている[1]．そうだとすれば，音楽を学ぶことは感情を表現することを学ぶことだと言える．そこで，筆者はすでに音楽教育の役割が，感情のコミュニケーションを学ぶことにあると主張した．一人一人が社会生活に円滑に適応していくためには，感情は上手に表現出来ねばならない．そのためには，一人一人の子供達がそれを上手に学んでいけるように学校と家庭と社会が互いに親密に協力しあっていかねばならない．単に国語や算数の点数だけを大事にするのでなく一人一人の子供達の円満な人格形成にこそ義務教育の役割があるといえよう．したがってこれからの教育は，受験競争によって歪められ，利己主義に犯されてしまうおそれのある子供達の心の中にやさしい心，あるいは思いやりの心を育てなければならない．そのためにはまず感動するということを体験させねばならない．例えば，美しい花を見てそれを美しいと思う心と，それを平気でむしり取ってしまう心の違いとでもいえようか．そしてその感動を友達と，あるいは先生と共有体験することによって，お互いの気持ちが分かりあえる心を育てなければならない．そしてその役割に最もふさわしいのが音楽ではなかろうか．すなわち義務教育において，円満な人格形成のために音楽が果たすべき役割を考えるとき，残念ながら音楽はその役割を十分に果たしているとは思えない．まさにこれは由々しき問題なのに，それほど激しい議論が沸き起こって来ないのはなぜなのであろうか．

2 音楽教育が抱える問題

まず音楽教育が抱える問題として第一に挙げられるのは，音楽の授業時間数の問題であろう．

音楽は中学校においても，いわゆる主要五教科に対して選択教科として授業時間数を減らされてきている．この背景には音楽は受験に関係がないという功利主義的考え方が第一に挙げられる．そのほか音楽の果たすべき役割についても，すでに述べたように，一般にはそれがそれほど重要であるという認識がなく，また実際に目に見えるような立派な役割を果たしていないことが，問題をさらに難しくしているといえよう．

3 小学校教員養成カリキュラムにおける問題

小学校教員養成課程の役割は言うまでもなく小学校全教科の授業をこなせる教員の養成にある．したがって，小学校教員養成課程のある大学では教職専門および教科専門の授業がほぼ平等に開講されている．しかし，これは表面上の平等であって学生達の音楽の学力を考えるとき，これはまさに悪平等以外の何物でもない．先に挙げた中学校の音楽の授業時間数減少という問題に加え，高校では音楽は美術や書道などの芸術教科とともに選択教科になっており，中学校以来全く音楽の授業を受けなかった多数の学生が小学校教員養成課程に入学してきているのである．ある数学の教授が教授会の席上で「小学校の算数を受け持つのであれば，あえて微分・積分とはいわないにしても，せめて代数・幾何くらいはきちんと勉強しておいてもらいたい．」と発言されたことがある．筆者に言わせれば，さしずめ音楽でいえば「フーガを書けとはいわないが，せめて和声学，対位法くらい勉強しておいてもらいたい．」とか，あるいは「ショパンのエチュードとはいわないがせめてチェルニーの40番くらいは弾けるようになっておいてもらいたい．」と言うような話に聞こえるのである．

国立大学に入学して来ている学生は，主要科目といわれている教科についてはおおいに勉強してきたであろうが，他の教科の学力については著しく不平等である．実際にこの問題についてはこれまでもたびたび指摘されてきたところであるから，ここであえてしつこく繰り返さないが，改善される兆しなど全くないといってよいであろう．したがってこれから，我々音楽教育に携わるものとして次の二点について，大いに主張し，研究し，改善していかねばならないと考えている．

1) 音楽教育の重要性を科学的に証明し，主張していくこと
2) 人間教育としてふさわしい音楽教育の在り方を研究し実践していくこと

そこで本稿ではまず第一に筆者が担当して来た小学校教員養成課程のための音楽科教育内容について，現在行っている授業内容およびこれからの目標について述べてみたい．

II 熊本大学教育学部小学校教員養成課程のための音楽教育カリキュラム

1 熊本大学教育学部小学校教員養成課程のための音楽科開講科目

熊本大学教育学部では小学校教員養成課程のためには次のような科目が開講されている．

◆教職専門科目「初等音楽科教育」半期2単位（必修）
◆教科専門科目「小学音楽Ⅰ」半期2単位（必修），「小学音楽Ⅱ」半期2単位（選択必修）

以上の3科目6単位でそれぞれのシラバスは次のようになっている．

◇初等音楽科教育

次の二つのコースに分けて授業を行っている．

【渡辺コース】 六つのコンセプト「動き」「即興」「民族音楽」「手造り楽器」「環境音論」「ミュ

ージカル」に基づく理念と具体的方法論.
従来の音楽教育における問題点を指摘するとともに，新しい音楽科のあり方についての考察，実験をグループなどで自主研究することも奨めたい.
【吉永コース】 まず，音楽とは何かということを考える．次に音楽の三要素リズム・メロディ・ハーモニーについて考え，即興リズムアンサンブルや旋律楽器によるアンサンブルのグループ発表などを行う．音痴についても考える．指導要領の鑑賞共通教材についても理解を深めたい.
◇小学音楽Ⅰ 1限目に合唱コース，合奏コースに分けるので必ず出席すること．それぞれ選曲，練習等グループ別に行い，その成果を発表しあい相互評価する.
◇小学音楽Ⅱ 次の各コースを選択すること．従って1限目に必ず出席すること.
(合唱)
(作曲) それぞれ詳しい内容については各担当の教官から説明がある.
(即興伴奏) 但し，ピアノに関しては全く初心者のみの受講を認める.
(ギター)
(リコーダー)
(ピアノ)

以上が小学校教員養成課程のために開講している音楽の科目である．この中で筆者が担当し，色々と試行錯誤を重ねて来た初等音楽科教育法について，ある程度の結論に達したと思われるので，現在の授業のありようについて学生の感想なども交えながら述べてみたい．なお，これまでの経緯については渡辺学著「現代の音楽教育－その理論と実践 (1)，(2)」にくわしく報告されている[2]のでここでは省略する.

2 初等音楽科教育法の授業計画とその内容

まず，学生たちの音楽的能力については大変なばらつきがあるので，その音楽的能力に合わせた授業の在り方などという考え方は全く意味がない．そこで，彼らの知的理解力に的を絞った授業を考えている．初等音楽科教育では毎回テーマを設けて学生と共にそのテーマについて考えながら授業を進めている．そのテーマとはおおむね次のようなものである.
(1) 音楽とは何か
(2) リズムとは何か
(3) メロディとハーモニーについて
(4) 音痴について考える
(5) 子供の心の発達と音楽教育の使命
以上である．次に具体的な内容についてみていく.
(1) 音楽とは何か

まず最初に数人の学生に「音楽とは何か」という質問をし，次にレナード・バーンスタインの「青少年音楽入門」の「音楽とは何か」を見る．バーンスタインは指揮をしたりピアノを弾いたりしながら，それにみごとな語り口を交えて，音楽が感情を表現することであるという結論に子供達を導いて行く．このビデオ鑑賞について一人の学生は「young people のための演奏会ということで，何が始まるのだろうと，非常に期待してビデオを見ました．普通私が音楽を聴くときには，まずその題名を知ってから聴こうとします．それは多分，その題名をもとに音楽を聴きながら自分の頭の中に映像を思い浮かべ，イメージをふくらませるためだろうと思います．しかし，今回このビデオを見ながら，このビデオの中に登場する子供達と一緒に“音楽とは何か”を考えて，

その結果“感情を引き出すもの”という答えを導き出したとき，わたしのこれまでの“音楽の聴き方”はまちがっていたのではないかと思いました．音楽を聴いて自分がどう感じるか，それが大切なのだと思いました．」という感想を書いている．

(2) リズムとは何か

ここでも最初に「リズムとは何か」という質問をし，つぎにカナダの打楽器アンサンブル「ネクサス」の演奏でスティーブ・ライヒの「木片の音楽」のビデオを見る．そのあとで学生達に4〜5人のグループを組ませ，即興的なリズム・アンサンブルの発表会を行う．ここでの目的は，自由なリズム・アンサンブルをさせることによって「音符だとか休符だとかいうのがリズムなのだ」という先入観を捨てさせることにある．学生達は簡単な道具で，しかもリズムだけで音楽が成立することに一様に驚いているようである．なお，この授業のアイデアは前附属小学校岩山恵美子教諭の研究授業から得たものである．

(3) メロディとハーモニーについて

ここでメロディとハーモニーを一緒のテーマとしてあつかう理由は，旋律楽器によるアンサンブルを重視しているからである．本当の意味でのアンサンブルはピアノや木琴，鉄琴のような音程が固定された楽器だけでは不十分である．筆者はかねがね小学校においても三度や六度のハーモニーが美しく重なり合うときの感動を子供達に味わって欲しいと考えている．そこでここでは，最初に美しい室内楽を鑑賞する．ボロディン弦楽四重奏団の演奏したボロディン作曲，弦楽四重奏曲第2番から「ノクターン」をビデオで鑑賞させているが，この演奏に感動しないものはこれまでのところいないようである．このあとハーモニーの仕組みについて説明する．純粋倍音律によってオクターブは1：2，完全5度は2：3，完全4度は3：4，長3度は4：5，短3度は5：6，長6度は3：6，短6度は5：8であることを説明するのであるが，簡単には理解してくれないようである．そこでバイオリンを用いて，それぞれのハーモニーの響きを重音奏法によって聞かせる．その後，ホーマン・バイオリン教則本の中から美しい二重奏曲を選び，筆者自身があらかじめ録音しておいた演奏に重ねて，二重奏をする．ここまでくれば，ほとんどの学生がアンサンブルの美しさ，楽しさを理解するようである．この後，再びグループを組み，リコーダーなど自分の得意な楽器でアンサンブルを練習し，発表会を行う．前期であればこの時期がちょうど七夕と重なり，後期であればクリスマスの時期と重なる．そこでそれぞれに七夕コンサートであったり，クリスマスコンサートであったりするのである．学生達はとても生き生きしており，授業時間外にグループ毎に集まって練習するなど，積極的に取り組んでいる．

(4) 音痴について

学生達の中には小，中学校時代に音楽の先生から音痴であることを匂わすようなことを言われ，傷ついているものが意外に多いことに驚かされる．心ない教師の一言は幼い子供の心に取り返しのつかない傷痕を残してしまうようである．精神的に未熟な子供達が，しっかりした価値観もないままに，受験地獄の中にほうり込まれ，しかも本来心の安らぎと感動との出会いの場であるべき音楽の授業においてそのような仕打ちを受けているとしたら，その教師の責任の重さははどれほどのものであろうか．もしかしたら，今の教育は，冷酷な犯罪を犯すような人間を，それとも知らずに育ててしまっているのかもしれない．

筆者はかねがね，音痴とは環境によって仮想的に作られてしまったものだと考えている．もちろん，先天的にどうにもならない音痴もあるであろう．しかしそれはごくわずかである．筆者がここで話題として取り上げるのは「狼に育てられた子」の話である．筆者はこの話を，もし仮に生まれたばかりの子供が，人間の社会から排除されてしまったとしたら，その子供の言語能力は

どうなるであろうかという疑問の形で，学生達に問いかけている．一方で，例えばモーツァルトのような天才を例に挙げ比較しながら，環境の影響について考えるようにしている．

次に簡単な混声合唱を練習する．最初は通常の方法で，つまりそれぞれのパート毎にピアノで音を取り，合唱する．もちろんハーモニーは全くそろわない．そこで今度は，片方の耳をふさぎながらもう一度パート別に音を取り合唱する．片方の耳をふさいでみると自分の声が大きくはっきりと聞こえる．学生達には自分の声と回りのハーモニーを注意を集中して聞くように何度も指示を与える．学生達はすでにハーモニーが美しく重なるということはどういうことか，感覚的にも理論的にも理解している．したがってこのような方法での指導は成功率がかなり高いと考えている．このようにして美しいハーモニーを奏でることができたときの彼ら一人一人の顔は輝きに満ちて美しくさえある．

昨年後期のクリスマスコンサートでのグループ発表の後，全員で「きよしこの夜」を歌ったときの一人の学生の感想は「今日はみんなで合奏を聴きましたが，どのグループもとてもすてきなハーモニーができあがっていました．音の組み合わせでこんなにも美しい音楽になるのかと感動しました．…中略…きよしこの夜の合唱はやっぱりすばらしいと思います．高校のときはこんなに美しくハモれませんでした．何がいったいちがうんでしょう．家にオカリナとギターがあるので冬休みに友達と音楽をやってみようと思っています．」

(5) 子供の心の発達と音楽教育の使命

このテーマは授業全体のテーマでもある．したがって，授業を進めながらそのつど考えることにしている．むしろ学生自身がアンサンブルの楽しさを体験することができ，ハーモニーの美しさを味わうことができたら，このテーマの答えは学生自身が自ら理解できるものと信じている．最後に学生のレポートの中から特に印象に残った部分を抜き書きしてみる．「…音楽活動で重要なことは何かを考えてみます．すると，教師のあり方が大きく影響すると思うのです．教師は子供達とともに，音楽活動の感動を共有し，その質を高めていく必要があります．そのためには，教師が子供達と同じように，音楽とは何であるかを再び問い直し，探ろうと問いかけ，その音楽を子供達とともに組みたてようとする姿勢が大切だと思います．その働きかけは，子供達の目から見ても新鮮でやる気を起こす材料になり得るでしょう．…中略…音楽には様々な可能性があると思います．国語の知識や算数の計算の仕方は黒板で，机上で教えることができても，感動は教えることができません．感動はやはり，教師や親，友人とともに経験をすること，新しい生活場面における新しい経験が子供達に新しい感動を引き起こさせるといえます．音楽は毎回がそのような場になり得るのではないでしょうか．…中略…今回，講義で音楽科教育を受けて，様々なことが経験できました．鑑賞，合唱，アンサンブル，リズム合奏など，まるで小学生に戻ったような気分でした．毎回が楽しくて，こんな授業だったら小学生も退屈しないだろうと思いました．そして，この工夫した授業を通して何を学ぶのかを自分なりに考えました．何が音楽科に必要とされているかを考えた今，多様な教材で，魅力ある授業をする責任が教師にはあるのだと思いました．」

註

1) ここの引用は後に述べるようにバーンスタインが young people's concerts というタイトルで子供達のために行った第1回目の演奏会で，彼自身が述べている言葉である．
2) 熊本大学教育学部紀要，第30号，人文科学，p.81-85 および，第31号，p.123-125.